Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-24

図書紹介　江利川春雄著『英語と日本軍』

惟任, 泰裕

(Citation)
研究論叢,23:76-77

(Issue Date)
2017-06-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041191

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041191

江利川　春雄　著

『英語と日本軍―知られざる外国語教育史』

惟任　泰裕（神戸大学大学院博士後期課程）

本書は、英語教育史研究の最前線において精力的に研究を発表しておられる江利川春雄氏（和歌山大学教授）が、2016年3月に発表した著作である。

江利川氏は、2015年7月に出版された『英語教科書は＜戦争＞をどう教えてきたか』において、「地球上のさまざまな民族同士が、戦争をすることなく、平和的に共存し合う関係を築くこと」を「外国語教育の究極の目的」として掲げ、「そうした理想に向かうため……過去の『戦争と外国語教育』の関係を明らかにすること」の必要性を指摘している。同書においては、戦前の英語教科書を題材として、英語教育が当時の若者をいかに戦争へと駆りたてていったのかが論じられた。本書もそれに続き、多くの史資料やインタビューに基づきながら、それまであまり語られることのなかった「日本軍における英語教育の知られざる実態」が明らかにされている。

本書の構成を以下に示す。

序章　英語教育の敗戦
第一章　近代陸海軍の創設と外国語
　一　幕末の軍制改革と西洋列強
　二　明治政府による日本軍の近代化
第二章　日本軍の外国語教育はどう変遷したか
　一　日清・日露戦争から第一次世界大戦へ
　二　軍縮期からアジア・太平洋戦争まで
第三章　アジア・太平洋戦争期の英語教育
　一　昭和陸軍の英語教育
　二　昭和海軍の英語教育
第四章　戦後日本の再建と英語
　一　英語教育の振興策と親米国民の育成
　二　旧日本軍の語学的遺産
　三　戦前と戦後の連続性
主要参考文献
おわりに

江利川氏は、日本軍の英語教育に「近代日本の外国語教育が抱えてきた問題が端的に表れている」と指摘し、以下の三つの問題点を挙げている。

一つ目は、「軍内部の官僚的な硬直化が進み、士官養成学校で教育される外国語が固定化されるようになった」ことである。とりわけ伝統的にフランス語とドイツ語を重視した陸軍の学校においては、英語の本格的な導入が遅れ、結果として、東條英機に代表される太平洋戦争期の陸軍指導者たちは「幼年学校から陸軍大学校に至るまで英語を学ぶことはなかった」とされる。江本茂夫のような英語の「達人」も、陸軍においては重用されることがなかった。一方、イギリス海軍に範をとり、英語を重視した海軍の学校においては、英語が重視されたものの、「いわば英語一辺倒」であったという批判は免れない。

二つ目は、「明治初期からの西洋崇拝とアジア蔑視が軍隊内にも持ち込まれ……アジアの諸言語の教育が軽視された」ことである。明治以降の戦前日本においては、西洋語が高度な文明を学ぶための「高級言語」であったのに対して、中国語や朝鮮語などのアジア語は「実用会話を中心とする『低級な言語』ないし『特殊語学』」とされた。そのため、軍の学校でアジア語について十分な教育が行われることがなく、結果として現地の人々との意思疎通に困難が生じることとなった。一つ目の問題点とも関係するが、戦前の日本軍は、固定化した外国語教育のために、情勢の変化に対応ができていなかったのである。

三つ目は、「外国語教育の実用的側面が弱く、インテリジェンス活動と十分に結合されていなかった」ことである。「英語で西洋学

問を学ぶ実学としての『英学』」の時代が終わりを迎え、「英語教育」の時代へと移行するなかで、軍の外国語教育においても「実用的な目的が薄れ、使う必要性に乏しい一般教養的な側面が強ま」ることとなった。そのため、「軍事情報の把握・活用のために外国語を学ぶという性格づけが脆弱」となり、後には「正確な敵情認識や情勢判断にもとづかない作戦司令を誘発」することとなった。このような英語教育のあり方は、「特別コースを開設し……良質の教育環境で集中的な訓練を実施」したアメリカ軍の日本語教育とは対照的であった。

本書で明らかにされた日本軍の英語教育における問題性は、今日の英語教育に対して大きな問いを投げかけている。それはつまり、今日の英語教育が、戦前の日本軍の英語教育と同様の陥穽にはまりつつあるのではないかということである。今日においては、グローバル人材の育成が声高に主張され、外国語教育が英語一辺倒の様相を呈している。そのなかで、グローバル人材の資質として、英語のみが学ぶべき言語であるとされ、中国語や韓国語を含む、その他の外国語への教育的関心が示されていない。一握りのエリートしか獲得しえない高度な英語能力の獲得が、前面に押し出されていることも大きな問題である。

本書は、日本軍の英語教育の歴史的実態を描き出すことで読者の知的好奇心を満たすのみならず、今日の英語教育が行きつく果ての危うさを認識させてくれる。江利川氏が主張するように、今を生きる我々は、過去の歴史から謙虚に学びつつ、英語教育のあり方を考えていく必要がある。英語教育・外国語教育に関心のある全ての人に、一読を強くお勧めしたい。

（NHK出版刊　2016年3月発行　本体価格1,400円）

奥平　康照　著

『「山びこ学校」のゆくえ―戦後日本の教育思想を見直す』

馬場　大樹（神戸大学大学院博士後期課程）

本書は、教育哲学・教育思想史を専門としてきた奥平康照氏が、和光学園の退職後2016年2月に発表した著作である。周知の通り、「山びこ学校」とは、1950年頃の山形県の山村にある中学校において、無着成恭によってなされた生活綴方を用いた教育実践である。「山びこ学校」は、民主的主体形成という戦後新教育の理念を体現した教育実践として、実践者だけではなく様々な研究者の間でも高く評価されてきた。

このような著名な教育実践に対して本書が提起する問いは、「『山びこ』実践とその思想が、日本の教育実践と理論の質的飛躍の基盤となる可能性をもっていたとするならば、それはなんだったのか。それは戦後教育実践・思想・理論史において、どこにいってしまったのか」という点にある。すなわち、「山びこ学校」が魅力的な教育実践であったことは確かであるが、これまでの教育学は後の教育実践を方向づけるまでに「山びこ学校」を理論化することに成功してきたのであろうか。成功してこなかったとすれば、その理論化の作業はどのような潮流の中で立ち消えてしまったのか。本書は、これらの問いに取り組むことを課題とするものである。

本書の構成は以下の通りである。

序章　「山びこ学校」と戦後教育学―「山びこ学校」実践とその思想は、どこへ消えたか

第Ⅰ部　「山びこ」実践と無着成恭―教育における「子ども」と「社会」の拡張と縮減―